

二〇一七年度 光塩女子学院中等科【第一回】

## 国語基礎入試問題

二〇一七年二月一日(水)実施

### 《注意事項》

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- ② 解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- ③ 解答は、解答用紙に書きなさい。
- ④ 記述問題の字数については、すべて句読点をふくみます。

□ 1 次の各設問に答えなさい。

(1) 次の各文の——部のよみをひらがなで書きなさい。

① 雪を頂あおく山々を仰あおぐ。

② 勇気を奮ふるう。

③ 郷土料理を味わう。

④ 被災地ひさいに救済きうさいの手を差しのべる。

⑤ 資料を回まわ覧する。

(2) 次の各文の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

① リンジリンジニュースが流れる。

② 事故のタイサクタイサクを練る。

③ グキテキグキテキな逆転ホームラン。

④ 雨のため遠足がエンキエンキになる。

⑤ 社会のハツテンハツテンにつくす。

(3) 次のことわざと反対の意味のことわざを下から選び、記号で答えなさい。

① あとは野となれ山となれ

② 君子は危あやうきに近寄らず

③ 善は急いそげ

④ とんびが鷹たかを生む

⑤ 船頭多くして船山へ登る

ア 蛙かえるの子は蛙かえる

イ 河童かっぱの川流れ

ウ 虎穴こけつに入いらいずいんば虎子こじを得えず

エ 三人寄もんじゆれば文殊もんじゆの知恵ちえ

オ 急せいては事ことを仕損しとんじる

カ 立たつ鳥とりああととををににここささず

(4) 次の( ) にもつともよくあてはまる言葉を、あとの選択肢せんたくしからそれぞれ選び、記号で答えなさい。(同じものを二度選ばないこと)

- ① うどんにしますか、( ) そばにしますか。
- ② 彼は天才かれというより( ) 努力家だ。
- ③ 雨が激しく降っている。( ) 雷かみなりまで鳴り出した。
- ④ 弟は眠ねむそうだ。( ) 夜ふかしをしたからだ。
- ⑤ いつもより早く家を出た。( ) 遅刻ちこくした。
- ⑥ 私は甘いもの、( ) ケーキが好きです。

ア しかし      イ そのうえ      ウ それとも      エ だから  
オ たとえば      カ つまり      キ なぜなら      ク むしろ

(5) 次の〈書き出しの文〉と〈結びの文〉との間にあるア～エの文を、意味が通るように正しく並びかえなさい。

〈書き出しの文〉 著作をよんで、もし感銘かんめいしたものに会ったならば、その作者の全集をよむことである。

ア 例えばトルストイならトルストイでもよい、その人の生育から死いたに到るまでの全過程をもし深く究めきわめたならば、それは大変なことであり、一生かかってもさしつかえないことである。 ※トルストイ：ロシアの作家

イ 一家の全集を読破するような人はめったにいなかった。

ウ こうして一人の作者に深く傾倒けいとうすることが、われわれの人生をみる眼めを広くし、他の作品を理解する上にも、それが本当に役立つのである。 ※傾倒：ある人や物事を心からしたうこと。

エ われわれの読書はとかく散漫さんまんになりがちで、あれこれとよみ散らす、読書としてもつとも有効なのは、たとえ範囲はんいはせまくとも、一個の人間に深く入ることである。 ※散漫：気持ちや考えが集中しないでまとまりがないこと。

〈結びの文〉しかし、自分の尊敬する人間像をもつということは、具体的にはこうして可能であって、それは人間研究の上にもはなはだ有効であろう。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

イギリス十九世紀の小説家にウォルター・スコットという人がいる。すぐれた歴史小説を書いて、文学史上、有名である。

このスコットは①寝て考えるタイプであったようだ。やつかいな問題がおこる。どうしたらいいだろう、などという話になると、彼はきまつてこう言ったものだ、という。

「いや、くよくよすることはないさ。明日の朝、七時には解決しているよ」。

いまここで議論するより、ひと晩寝て、目をさましてみれば、自然に、おちつくところへおちついている、ということを経験で知っていたからであろう。

朝の頭を信頼し、朝の思想に期待していたことになるが、これは何もスコットに限ったことではなさそうである。その証拠に、英語には「一晩寝て考える」(sleep over) という成句もある。朝になって浮ぶ考えがすぐれていることを、多くの人々が知っていたのだと思われる。

ガウスという大数学者がいた。ある発見をした記録の表紙に「一八三五年一月二十三日、朝七時、起床前に発見」などと書き入れた。「一晩寝て考えた」あるいは「いく晩も寝て考えた」ことが、朝になっておどり出たのであろうか。

ヘルムホルツも大数学者であったが、朝、目をさますと、そのとたんにすばらしい考えが浮んだ、と語っているそうだ。

このような例を見てくると、発見は朝を好むらしい、ことがわかる。

「三上」という語がある。その昔、中国に歐陽修という人が、文章を作るときに、すぐれた考えがよく浮ぶ三つの場所として、

②馬上、枕上、厠上をあげた。これが三上である。この枕上というのは、普通は、夜、床に入ってから時間のるように考えられるが、そうではなく、朝、目をさましてから、起き上がるまでの時間ととれば、スコットも、ガウスも、ヘルムホルツも、枕上の実践家だったことになる。

だいたい、夜、寝る前に、あまり深刻なことを考えるのはよくない。寝つきを妨げる。眠ろうとすると、かえって、あとからあとからいろいろなことが頭に浮んでくる。こういうときに、妙案があらわれるのは難しい。

寝る前には、あまり、おもしろい本を読むのも考えものである。いつまでも刺激が尾を引く。心が高ぶって、寝つきが悪い。おそくなつてから、コーヒーや紅茶を飲むのはいけないのは知っているのに、興奮するような本を平気で読んでいる人がいる。なる

べく、頭を騒がせないことだ。そして、朝を待つ。

枕上も、夜の時間ではなく、朝の枕上だと解したい。われわれの多くは、この朝のひとときをほとんど活用しないているのはあるまいか。いやしくも、ものを考えようとするのであれば、目をさましてから、床を離れるまでの時間は聖なる思いに心をこらすことを心掛けるべきであろう。

そのためには、タネがいる。ぼんやりしていたのでは、何も生まれない。考えごとがあるから、着想が出てくる。

どうして、「一晩寝て」からいい考えが浮ぶのか、よくわからない。ただ、どうやら、問題から答が出るまでには時間がかかるということらしい。その間、ずっと考え続けていてはかえってよろしくない。しばらくそっとしておく。すると、考えが凝固する。それには夜寝ている時間がいいのであろう。

よく、「朝から晩まで、ずっと考え続けた」というようなことを言う人がある。いかにもよく考えたようだが、その実は、すっきりした見方ができなくなってしまうことが多い。こだわりができる。大局を見失って、③に走って混乱することになりかねない。

前にも引き合いに出したが、外国に、

「見つめるナベは煮えない」

ということわざがある。早く煮えないか、早く煮えないか、とたえずナベのフタをとってはいは、いつまでたっても煮えない。あまり注意しすぎては、かえって、結果がよろしくない。しばらくは放っておく時間が必要だということを教えたものである。

考えるときも同じことが言えそうだ。あまり考えつめては、問題の方がひっこんでしまう。出るべき芽も出られない。一晩寝てからだと、ナベの中はほどよく煮えているというのであろう。枕上の妙、ここにありというわけである。

ことと次第によつては、一晩では、短かすぎる場合がある。大きな問題なら、むしろ、長い間、寝させておかないと、解決に至らない。考え出して、すぐ答の出るようなものは、たいした問題ではないのである。本当の大問題は、長い間、心の中であたためておかないと、形をなさない。

W・W・ロストウはアメリカの経済学者で、ケネディ大統領の経済顧問として世界的に知られた人で、その『経済伸長論』は

④画期的な学説として高く評価された。その序論を読むとこの問題にはじめて関心をいただいたのは、ハーバードの学生としてであ

ったと、書いてある。それから何十年もの歲月さいげつが流れている。忙いそしかったから、まとめるのが遅おれたなどということではない。いつも、心にはあった。あたためていたのである。それがようやく、卵たまごからかえたのである。こういうように、大問題はヒナにかえるまでに、長い歲月さいげつのかかることがある。

ロストウにしても、この理論にだけかかわっていたのではなからう。ほかのことを考えることもあったに違ちがいない。それは、怠なまけていたのではない。⑤を与あたえていたのである。『見つめるナベ』にしていたら、案外、途中とちゆうで興味を失うてしまっていたかもしれない。

このごろはすくなくなつたが、昔は、ひとつの小さな特殊問題とくしゆしゆめいを専心研究するといふ篤学とくがくの人がよくいたものである。わき目もふらず、ひとつのことに打ち込こむ。研究者にとつて王道を歩あるんでいるようだが、その割には効果のあがらないことがしばしばである。

やはり、ナベを見つめすぎるからであろう。ナベにも煮にえるのに自由な時間を与あたえなくてはいけない。あたたため、寝ねさせる必要がある。思考の整理法としては、寝ねさせるほど大切なことはない。思考を生み出すのにも、寝ねさせるのが必須※ひつすである。

作家にとつてもつともよい素材は幼年時代※せうねんの経験であると言いわれる。幼いころのことももとにして書かれた、幼年物語、少年物語、そういう名はついていなくても、そういう性格の作品が、すぐれていない作家は凡庸※ぼんようであるとしてよい。

なぜ、作家の幼年、少年物語にすぐれたものが多いのか。素材が充分じゅうぶん、寝ねさせてあるからだろう。結晶けつしょうになっているからである。余計なもの※いけいは時の流れに洗せんわれて風化してしまっている。長い間、心の中であたためられていたものには不思議な力がある。寝ねさせていたテーマは、目をさますと、たいへんな活動をする。なにごともしやみと急いではいけない。人間には意志の力だけではどうにもならないことがある。それは時間が自然のうちに、意識を超こえたところで、おちつくところへおちつかせてくれるのである。

努力をすれば、どんなことでも成就じゆうじゆするように考えるのは思い上がりである。努力しても、できないことがある。それには、時間をかけるしか手がない。幸運は寝ねて待つのが賢明※けんめいである。ときとして、一夜漬つげのようにさつとでき上がることもあれば、何十年という沈潜※ちんせんのうちに、はじめて形をととのえるということもある。いずれにしても、こういう無意識の時間を使って、考えを生み出すということに、われわれはもつと関心をいさぐべきである。

(外山滋比古『思考の整理学』による)

※注 歐陽修…中国の政治家・文学者。 枕上…枕の上。 廁上…廁の上。 廁とはお手洗い（トイレ）のこと。

実践…自分で実際に行うこと。 妙案…良い考え。

篤学…熱心に学問に努めはげむこと。 必須…どうしても必要なこと。

賢明…かしこく物事の理くつがよくわかる様子。 沈潜…深く沈めること。

必領…どうしても必要なこと。

凡庸…平凡で、すぐれたところがない人。

専心…一つのことに集中すること。

問1 — ①「寝て考える」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 疲れた頭をよく休めてから考える
- イ 夢の中で思いもかけないことを考えつく
- ウ 眠りにつくまでの間、床の中で考える
- エ 一晚寝た後に考えが浮かんでくる

問2 — ②「馬上」に最も近いものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 移動中の電車の中
- イ 自然と触れ合うところ
- ウ 初めて行く旅先の土地
- エ 飲食をするところ

問3 空欄③にふさわしい語を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 根幹
- イ 枝葉
- ウ 花実
- エ 道草

問4 — ④「画期的な」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 長期的な見通しを持っていて優れている
- イ 計画を立ててよく練られている
- ウ 新しく時代を区切るほどめざましい
- エ 今後とも誰も思いつかないほどめざましい

問5 空欄⑤にふさわしい二字の熟語を文中から抜き出して答えなさい。

問6 この文章を読んだ人たちの発言を次に記します。本文を正しく読み取っているものには○を、本文の理解に誤りがあるものには×を答えなさい。

- ア 人間の努力を超えたところで時間が解決してくれる問題があることを重視すべきだ、と筆者は考えています。
- イ “見つめるナベは煮えない” ということわざは、目の前の対象を気にしすぎると物事がうまくいかないことを表しています。
- ウ どんな作家でも幼年時代を素材にした作品には、時の流れに洗われたことによる不思議な魅力があります。
- エ 大きな問題を解決するためには長い歳月が必要なので、あきらめずに考え続けなければならないと筆者は考えています。